

名古屋大学

NUA
nagoya university
archives

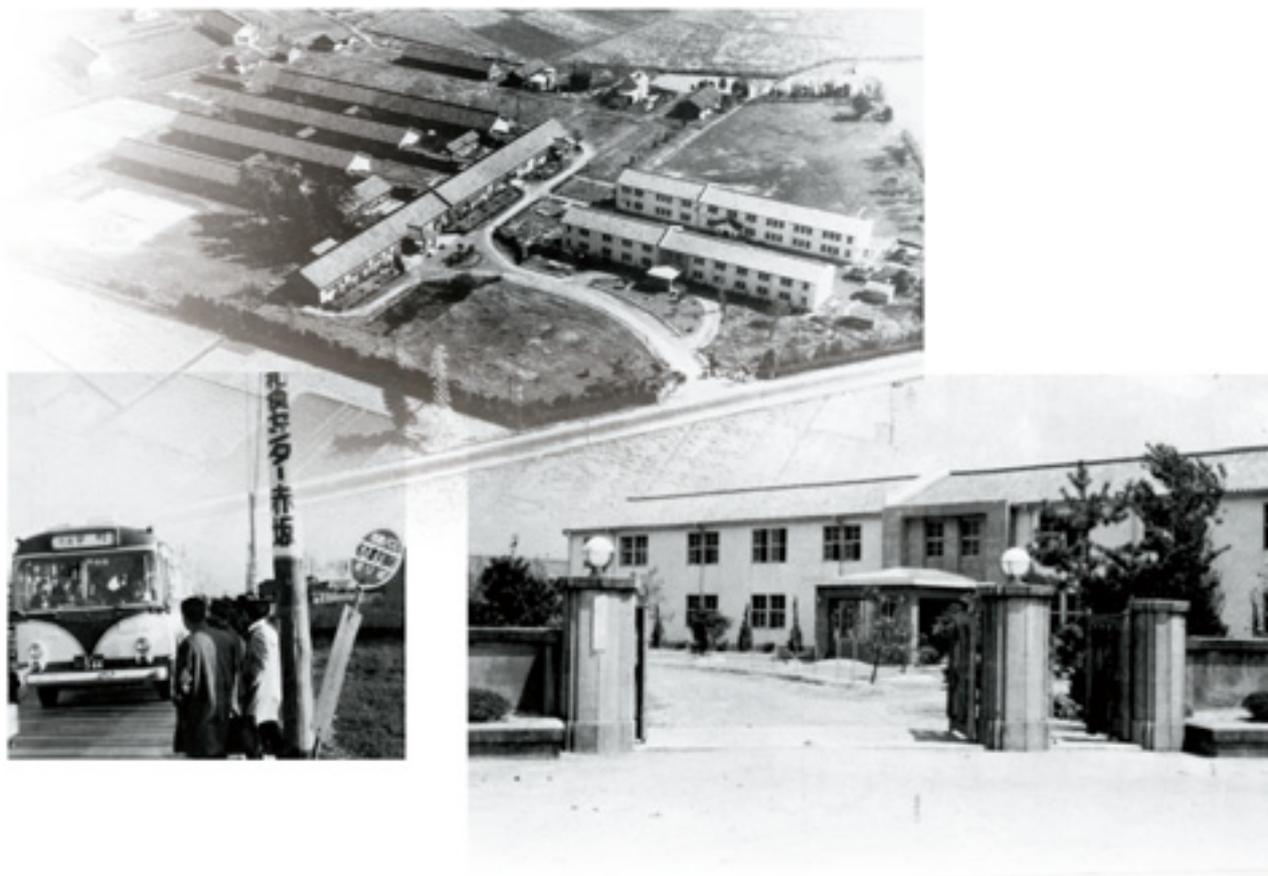
大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第17号 2004. 9

目次

Contents

| | |
|--|----|
| 大学文書資料室に期待するもの（総長・平野眞一） | 2 |
| 大学文書資料室の発足（室長・加藤鉦治） | 3 |
| 「汽車ぽっぽ」名古屋大学農学部創設のころ（名誉教授・赤澤 堯） 史林遍歴（9） | 5 |
| 資料室だより | 8 |
| 資料室日誌（抄） | 9 |
| 総長講義の紹介 | 10 |



名古屋大学安城キャンパス（1951～66年）の全景（上）・正門（下・右）・通学風景（下・左）（本文5～7頁参照）

大学文書資料室に期待するもの

名古屋大学総長 平野 眞一

近年、国内他大学において、アーカイブズ(文書館)の設置が進んでいる。たとえば、平成16年4月現在、旧国立大学では東北大学(史料館)、東京大学(史料室)、京都大学(大学文書館)、広島大学(文書館)、九州大学(大学史料室)などにアーカイブズが設けられており、北海道大学では来年度の文書館設置に向けて準備が行われているとのことである。こうした状況の中、本学が本年4月1日に国立大学法人としての新たな第一歩を踏み出したのと同様に、従来の大学史資料室は大学文書資料室に改組されて大学アーカイブズとしての新たな第一歩を踏み出した。

今回の改組によって(再)発足した大学文書資料室は、およそ20年前の昭和60年度に設置された名古屋大学史編集室に起源をもつ組織である。同編集室は、その名称が示すごとく『名古屋大学五十年史』の編集・刊行を目的とした組織であった。その後、『名古屋大学五十年史』刊行に伴う同編集室の廃止(平成7年度末)と同時に平成8年度から名古屋大学史資料室が新たに設置され、さらに平成13年度には大学史資料室へと一部改組されている。

ところで、旧組織の大学史資料室の設置目的は、同室規程第1条において、「名古屋大学にかかわる歴史的資料の恒常的な収集、整理、保存及び活用並びに調査及び研究を行うため」とされていた。一方、新組織の大学文書資料室の設置目的は、同室規程第1条において、「本学の半現用及び歴史にかかわる文書並びにその他の記録を管理し、調査研究を行うとともに、本学情報の公開に積極的に対応するため」とされている。新旧両規程を比較すると、大学文書資料室は二つの機能を担う組織であることが理解できる。一つは、旧大学史資料室が担ってきた「歴史資料館」としての機能であり、もう一つは、今回新たに付加された「公文書館」としての機能である。

前者については、旧組織としての過去7年間の活動実績を土台に、それをより発展させていくことが目指されるべきであろう。一方、後者については、本学が今年5月にとりまとめた「平成16年度 国立大学法人名古屋大学 年度計画」において、「大学文書資料室による支援を得ながら、法人文書の保存期間の見直しを図るとともに、本学における文書管理の基本方針の策定及び文書管理システムの構築を進める」としているように、全学的な期待に応えることが求められている。



おそらく、前者の機能は主として学外に向けて発揮されるものであり、後者の機能は学内に向けて発揮されるものである。その点からいうと、大学文書資料室は、学外・学内のいわば二つのベクトルの活動を同時に扱う全学的な教育研究施設と位置づけられる。それゆえ、同文書資料室にはいまだ十分な規模とはいえないとしても専任の専門スタッフを配置して、文書記録管理の実務支援および教育・研究の機能を有する将来的な大学アーカイブセンター(仮称)の設置に備えた諸活動を担ってもらっていることになっている。

名古屋大学は、国費で運営される法人格をもった大学として、社会に対して優れた教育・研究を行う義務を負っている。また、同時に本学は、社会に開かれた大学として、いわゆる情報公開法に基づく法人文書の開示請求への対応はもとより、その情報開示制度とは別に、学内印刷物や歴史的な文書資料を包括的に収集・保存して社会的共有財産として常に利用可能な状態で管理・公開することも要請されているといえる。

今回の改組を契機に、大学文書資料室は、年度内に東山キャンパス外周道路に面した本部別館(旧名古屋

工事事務所)内に移転する予定である。図書館・博物館に並ぶフロント施設として、大学文書資料室が本学と地域社会とのインターフェイス的な機能を果たすことに対する期待が込められているのである。本学のL (Library)・M (Museum)・A (Archives) のそれぞれ

が固有の機能を発揮しながら LMA 連携による相乗効果を生み出すことで、社会に貢献できる拠点大学としての本学の存在意義をより一層高めることができるものと考えている。

大学文書資料室の発足

大学文書資料室 室長 加藤 鉦治

大学文書資料室は、従来の大学史資料室を改組する形で、この4月に発足した。

これまでの大学史資料室は本学の歴史資料の収集・保存・管理・活用・調査研究が主務であったが、改組によって、保存期間が満了した法人文書(大学文書)の分類・整理・評価選別と保存・管理という業務が、あらたに課されることになった。前掲の平野総長による論稿にあるように、本学におけるいわば歴史資料館的な機能と公文書館的な機能とをあわせもった施設として設置されている。

これら二つの業務をになうことになったことは、大きな意義を持つ。記録のライフサイクルに照らすと、保存期間を過ぎた記録文書の評価選別と保存・公開・活用を担当するのはもちろんこと、それ以前の段階、すなわち記録の発生から、記録の職務利用、職務利用のための記録管理までの段階にも、資料室が関わることになるからである。

法人文書のファイリング方式などが部局や事務組織ごとに任されているは、それを活用するさい、多大な時間や労力を要することになりがちであるし、情報公開法にもとづく文書開示請求があったばあい、迅速かつ効率的な対応などができにくい。法人文書・歴史資料の運営管理の合理化と情報公開への積極的対応という大きな期待にこたえて、大学文書資料室は発足したのである。

このような期待にこたえるには、記録が途切れるこ

となくスムーズに流れるシステムティックな体制づくりを急がなければならない。本室では、目下、「シームレス型記録管理システム」の構築をめざした研究開発を精力的にすす



めている。今後は、デモシステムの完成度を一段と高め、ワークショップ等における実地試験を重ねて、本システムへの移行をめざす予定である。法人文書と歴史資料を一元的に管理運営するこのシステムの開発は、大学の情報公開を積極的に支援することにもなるだけに、緊急かつ重要な課題であると心得ている。

ちなみに本室は、情報公開社会の進展するなか、本学の文書・記録管理を担当する施設として、総務省から認定を受けている。また、本学の平成16年度の「年度計画」では、「大学文書資料室による支援を得ながら、法人文書の保存期間の見直しを図るとともに、本学における文書管理の基本方針の策定及び文書管理のシステムの構築をすすめる」と期待されている。シームレス型記録管理システムの具体的な運用をとおして、この期待にこたえたいと思っている。

大学文書資料室に改組されたからといって、本学の歴史にかかわる記録資料の継続的な収集、整理、保存および活用など、大学史資料室時代の主務であった、歴史資料館的な機能が軽んぜられることはない。

とりわけ、目下、名古屋大学全学同窓会(NUAL)

の発足にともない、「同窓生による『名古屋大学アイデンティティ』の探求が勢いを増している」ときだけに、本室の歴史資料館の活動への期待はいよいよ大きくなるであろうと自覚している（本ニュース前号の佐々木前副総長の論稿を参照）。これまで築きあげてきた伝統ある「歴史」を資源として、これを法人化された大学として、いかに活用して事業展開するかは、これからの重要な経営課題となるはずである。

大学文書資料室では、公文書館的業務と歴史資料館的業務を遂行するなかで集積した資料・経験を生かした教育研究活動と大学広報の支援活動もまた、これまでと同じように、意欲的に展開していく。身体的にいうと、教育活動としては、全学教養科目として、「名大の歴史をたどる」という自校史教育、ならびに「情報公開と文書資料 文書の世界を歩く」と題した講

義を開講する。大学広報の支援活動としては、本学の沿革・軌跡にかかわる展示、文書資料管理や文書館活動への関心・理解を深めるためのワークショップ「アーカイブズのすすめ」の開催など、これまで実施してきた学内外への情報発信ないし地域貢献につながる諸活動を、一段と充実させることを考えている。

大学文書資料室は、限られたスタッフながら、あたらしい任務もになることになっただけに、職務遂行に息つく暇もない日々である。もう少し手厚い手当を受けて、図書館および博物館との連携を一段と進展させながら、思う存分の活動を展開したいものである。

以上、この4月から2年間、大学文書資料室の責任をまかされた者として、本室の課題を紹介し抱負を述べさせていただいた。ご支援とご協力を衷心よりお願いする次第である。

2004年4月、「大学史資料室」は 「大学文書資料室」へと改組されました

平野眞一総長による巻頭寄稿文にも書かれていますように、2004年4月より、従来の「大学史資料室」を改組する形で新たに「大学文書資料室」が設置されました。今回の改組によって、大学アーカイブズとしての大学文書資料室には、これまで以上に図書館・博物館と並ぶいわゆるフロント施設としての機能が求められることとなります。

新組織のスタッフ構成は、室長（併任教授）、室員（専任助手2名）、事務職員（専門職員・事務補佐員各1名）の5名体制となり、事務職員層の充実が図られました。また、大学文書資料室の管理・運営に関する委員会として、大学文書資料室協議委員会と大学文書資料室運営委員会が設けられています。

前者の協議委員会は、理事（副総長）、学内部局長、大学文書資料室長等の23名で構成され、大学文書資料室の重要事項を審議することになっています。後者の運営委員会は、大学文書資料室長、附属図書館長、博物館長、学内部局の選出委員、大学文書資料室員等の23名で構成され、大学文書資料室の運営に関する事項を審議することになっています。新しい運営委員会には、大学文書資料室と各部局の文書管理担当者との連絡調整を図るために、文書管理担当者連絡会が新たに設けられました。

なお、今回の改組に伴う大学文書資料室に関する学内規程は、次の通りになっています。各規程等の内容については、大学文書資料室ウェブページ（<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>）にてご覧ください。

- ・名古屋大学大学文書資料室規程（2004年4月制定）
- ・名古屋大学大学文書資料室協議委員会規程（2004年4月制定）
- ・名古屋大学大学文書資料室運営委員会規程（2004年4月制定）
- ・名古屋大学大学文書資料室利用規程（2004年4月制定）
- ・名古屋大学大学文書資料室運営委員会専門委員会細則（2004年6月制定）

史林遍歴(9)

「汽車ぽっぽ」 名古屋大学農学部創設のころ

名古屋大学名誉教授 赤澤 堯

国立大学法人化に伴い、名古屋大学は新しい一歩を踏み出した。農学部、大学院生命農学研究科の今後の一層の発展が期待されている。この機会に、農学部創設時代の資料を名古屋大学大学文書資料室に提供してはどうかということである。断片的ではあるが以下、背景などについて記してみたい。その多くはいつてみれば hidden story の類いであるが、何ほどのかの興味を持っていただけるならば幸いに思う。

農学部の歴史には、二つの重要なステップがあった。第一が昭和26年安城市に産声をあげた学部創設であったことはいままでもない。第二は名古屋市東山キャンパスへの移転であり、このときをもって名古屋大学は鶴舞地区の医学部をふくめて名実ともに総合大学として出発することになった。

公的記録文書として農学部三十年史、五十年史があるが、前者の冒頭に「安城の学園生活(その1)」がある。どの様な経緯でこれが掲載されることになったのかを思い出せないが、筆者(赤澤)が中日新聞に寄稿した「ヘビ事件」がそのまま転載された。まだ教職員総数が僅かの創設後日の浅い頃のエピソードである。今では信じられないようなノンビリした安城の田園風景が偲ばれる。その登場人物のなかにはすでに鬼籍に入った人たちも少なくない。

新聞紙面の活字が三十年史に転記されたことについては、その時の編集者の大らかな気持ちがあったからだと思う。自由を尊重するというと大げさだけれども、農学部のそのような精神的風土が受け継がれて今日に至っているのは確かで、誇りにしてよいのではないか。安城は日本のデンマークなどといわれていたが、当時の写真からも、ゆったりとした野趣のようなものが感じとられる。

創立当初の名古屋大学はタコ足大学の異名をもっていた。農学部に限っても創設直後のメンバーはあちこちに分散していた。名古屋城二の丸陸軍兵舎跡の本部(農学部事務室)、東山理学部生物学教室、熱田にあった工学部付属の産業科学研究所の一室、安城農業試験場などである。

私は昭和26年卒業後、生物化学舟橋三郎教授の新米助手として赴任したが、半年ばかりは二人連れ立って



建設中の農学部1・2号館(安城)

東海道線に乗り上記熱田に間借りしていた産研まで通勤した。その当時舟橋先生一家から頂戴した温情を忘れることはできない。もともと生粋の東京人であったご本人も都落ちの思いを持っておられたにちがいないが、若僧を慈しみ、救いの手をさしのべてくださった。一、二度一緒に安城の市中へ映画を見にいったことがある。正確なタイトルを思い出せないが、その一つが当時有名な阿部知二原作の「女の園」であった。田舎映画館の観客席は畳敷で、幕開け前、拡声器が、「あべちじ原作、女のえん、女のえん」と繰り返し放送した。その2、3年後のことであったと思うが、同僚横山昭は洋画を見に名古屋まで出かけたが、最終列車で安城に帰り着くために途中で退場せざるをえなかった無念の経験を話していた。

そうこうしているうち、安城の旧青年師範学校の木造平屋建の空屋に移転集合がはじまった。木造2階建の農学部新校舎二棟の建築が開始されたのはさらに一年後のことである。国全体がまだ戦後の疲弊から抜けきれておらず、新旧の茅屋校舎はおよそ大学のイメージとは程遠いものであった。安城のまちには名門安城農林高校と県立安城高校があったが、農学部がよく前者とまちがえられたというのは本当の話である。伊勢湾台風襲来で、農学部の多くの建物が壊滅的被害を受けた記録写真はそのすさまじさを物語っている。

当時南安城の方に出かけたことがあったが、帰路方角がわからなくなってしまった。畑仕事をしていた農夫に道を尋ねたけれども、どうも話が通じない。こち

らも合点がいけない。要するにこんな田舎に東京六大学野球のメイダイ（明大）があるわけがないという奇妙な話の内容であった。そのとき以来、私は略称名大ではなしに、名古屋大学と言うようにしようと決めた。

私より半年ばかりおくれて着任した瓜谷さんの黒班病サツマイモの研究メンバーに加わるようになったのは2、3年たってからである。時に思いだすことがあるが、こがらしの吹く大寒の最中、実験材料のイモを求めてサツマイモ栽培篤農家 刈谷農場 を訪れたことがあった。やっと探しあてた農家の主人から、こんな寒い日にム口を開けることは出来ないと言われた。仕方なしにまた長い道のりを歩いて大学まで引き返さざるをえなかった。若かったとはいえ、そのときの孤独感、無常感は精神的な疲労となって身に沁みだした。

いまでは想像できないことであるが、NAD や CoA を調製するために、何度か知立の公設家畜屠殺場に新鮮な家畜の臓器を求めに出かけた。鳩の胸筋からチトクローム オキシダーゼを調製するため、安城駅前の民家の軒下に網をはって野鳩をつかまえたこともあった。もっとも Krebs(Sheffield)や Walker(Durham)の回顧的伝記を読むと、英国の生化学者も戦争後同じ様な経験をしたらしい。「バケツ生化学」の文字がある。

安城のまちには簡易水道は敷設されていたのかも知れないが、農学部でははじめの頃自前の電動汲み上げ井戸の水を飲用と実験に用いていた。しょっちゅう故障した。相棒の宮野真光は、この井戸水はアルミニウムの濃度が高いからそのまま飲むと頭が悪くなるという、毎夜下宿に帰る時、昼間実験室でつくった蒸留水を大きなガラス瓶にいれて持ち帰っていた。

私たち初期のメンバーは、教育、研究の両面において東山地区理学部の人たちからずい分助けられ、また

恩恵をうけた。江上不二夫、山崎一雄、森健志、中西香爾などの人たちである。瓜谷さんと一緒に時々江上研究室を訪れる機会をもち、つわもの揃いの面々と親しくなった。彼等は東山に迷い込んだ野犬をつかまえてすき焼きパーティーの材料にしたらしく、



当時の教職員

その道の達人が畏友（故）山田敏郎であった。江上先生が何を食べさせられるかわかったものではないと笑っておられた。

まだきびしい農薬の法的規制がなかった時代であり、安城の農家では水田稲作の二化メイ虫退治のために強力、しかも猛毒パラチオン（有機リン製剤）撒布が普及していた。おそらくこの薬で自殺をはかった農家の娘さんの吐しゃ物がかかった障子紙を持参して、Pの定性反応を調べてくれないかと頼まれたことがあった。農学部の古い木造校舎、とくに床下は野ネズミの巣窟で、それを退治するもっとも有効な手段として殺鼠剤ヨード酢酸をまぶしたダンゴを床下におく方法が普及していた。その頃瓜谷美代子夫人は夫君の実験を助けるために毎日愛犬とともに研究室に来ておられた。その愛犬が誤ってこの毒ダンゴを口にして非業の死をとげたのは、忘れがたい悲しい思い出である。

ふり返ると、農学部2期生となるべき受験生の試験監督にかり出され、雪が舞う日、当時滝子にあった教養部まで出かけたことを覚えている。農学部第1期卒業生は昭和35年3月、新装なった東山キャンパス豊田講堂で行われた全学卒業式典に参加した。私がフルブライト留学生として2年間の米国留学を終えて帰国した翌年ではなかったかと思う。帰国前パークレーのスタジアムで行われた全学卒業式典（コメンメント）の情景は印象深いものであった。チャンセラーから授与されるディプロマと祝辞に応えて、新卒業生たちは歓声をあげて一斉に帽子を空高く投げ上げるのである。農学部第1期卒業生の総代が学長から証書を受け取るとき、安城の農場で採取した菜の花をもっていつて歓声とともに一斉に投げ上げるのは素敵な試みではないか、是非とも農学部の伝統としてはどうかと学生たちにもちかけた。けれども日本の学生はシャイだったのか 結局これは実現しなかった。

記憶が正しいとすると、この卒業式は豊田講堂の正式竣工式典前に特別のはからいで行われたのではなかったかと思う。後日竣工式典のとき、旧知の設計者楨文彦と話す機会があった。勝沼精蔵総長が青写真にある新講堂前の広い前庭をみて、学生のデモを危惧して難色を口にされたけれども、自分はむしろ望ましいことではないかと反論したという打ち明け話をしてきた。

本稿の主題「汽車ぼっば」にもそれに類するような思い出がある。決してフィクションではないことは、埋もれていた楽譜が偶然出てきたことがその証しである。正直いって、ずい分時間がたち、それを作った

ときの正確な経緯は忘却のかなたにあるが、これも安城時代の一コマである。学年進行とともに教職員はだんだんとふえ、研究室活動も軌道にのってきたとき、瓜谷郁三、(故)宗像桂教授(当時は助教授)が中心になって東京から恩師を招待して学内を案内し、歓迎の宴席をもうけたことがあった。その席において新しく出来た名古屋大学農学部は“蒲郡の農学校”と揶揄されたのであった。ガタピンの木造校舎の実体がまったくそれにふさわしいものに映ったのは当然であったかもしれない。その頃出版された谷崎潤一郎の名作「細雪」の舞台となったのが安城から遠くない保養地蒲郡の有名な蒲郡ホテルである。数十年の歳月がすぎたが、当時の情景を覚えている人はもう余りいないかもしれない。

筆者は平成4年名古屋大学を定年退職した。その機会に長年苦楽をともにした先輩、同輩、また若い学生たちに感謝するためのささやかな集まりをもつことにした。そのときのためにと歌詞を作り、妻の友人に作曲を依頼した。出来上がったのが「汽車ぽっぽ」である。その楽譜は即興的なものであったが、かといって決してザレ歌の類いではなかった。どういう理由であったか、放置されたまま歳月

がすぎ、私自身もその存在を忘れてしまっていた。時々楽譜を作って下さった方には申しわけないという思いが去来しながらも忘却を繰り返すことになった。

冒頭にも書いたように、昔の書類に紛れていたその譜面が偶然出てきたので、瓜谷教授にそのことを伝えたところ、記念に大学文書資料室に提供したらどうかという好意的助言をもらった。文字どおり当時の農学部の若い面々の心意気とでもいうものが感じとられ、多少のユーモアもあるように思うがそれは自画自賛にすぎるかもしれない。歌詞をふくめてどなたかが譜面にも手を入れて下さるならばもっとよいものになるかもしれない。

安城時代の名古屋大学農学部の古い写真もいくつか出てきた。それは既に記録されているものと重複するものもあるかもしれない。初期の教職員 特に(故)増井清、(故)雨宮育作、(故)舟橋三郎、(故)芦田淳などの先生方の姿がある。安城から鶴舞公園で開かれたメーデー集会に参加したときの写真も出てきた。戦争反対のスローガンをかいた自製のプラカードをかついで渦巻きデモに加わった時の情景が臉に浮かぶ。その頃は、皆一様に若く純真であったことが本当になつかしい。
(文中敬称略)

むーかし むーかし その むかし みかわの原に だいがくが
 あったとさ その名は なごや だいがく のーがくぶ
 のーがくぶ おくちの わるい せんせいが いったとさ
 ナニナニ がまごうりの のうがっこう シュッシュポッポ シュッシュポッポ シュッシュポッポ

- 昔、昔、その昔
ミカワの 原に 大学があったとさ
その名はナゴヤダイガク ノウガクブ ノウガクブ
お口の悪いセンセイが 言ったとさ
ナニ? ナニ? がまごうりの農学校?
シュッシュポッポ シュポッポ
- それから早くも 40年
おわりナゴヤの東山 東山
お城の見える丘の上 そびえたつ そびえたつ
はてはてなにが たったのか? たったのか?
ナニ? ナニ? がまごうりの農学校?
シュッシュポッポ シュポッポ シュポッポ
- いえいえそれは ちがいます
なごや大学 農学部 農学部
ハシレハシレ野こえて、山こえて、鉄橋こえて、どこまでも
われらが機関車 21世紀にむけてー
ハシレー ハシレー ハーシーレ

資料室だより

『スケッチ名大史』と 『名大史ブックレット』第8巻を刊行しました

大学文書資料室では、本年3月に『スケッチ名大史』と『名大史ブックレット』第8巻を刊行しました。

昨年12月7日、名古屋大学は東京で「名古屋大学東京フォーラム」を開催しましたが、その際大学文書資料室（当時は大学史資料室）は、本部の支援を受けてパネル展示を行いました。『スケッチ名大史』は、この時の展示パネルを活用して作成したものです。

内容は、名大のキャンパスの歴史です。明治初年の愛知医学校・愛知病院から、いくつかの前身諸学校をへて、どのような経緯で現在の東山・鶴舞・大幸キャンパスに至ったのかを、当時の貴重な写真や図面などを用いて分かりやすく解説しました。

『名大史ブックレット』の第8巻は、新制名古屋大学の包括学校シリーズとして、岡崎高等師範学校をとりあげました。敗戦の4ヵ月前の1945年4月に創設され、戦後まもなく新制名古屋大学に包括されて、わずか7年で廃止される運命をたどった同校ですが、創設までの誘致運動、空襲による焼失、敗戦後の紆余曲折など、その歴史は名大史を考えるうえで大変重要な内容を持っています。そうした内容を分かりやすくコンパクトにまとめたのが本書です。

上記の刊行物をご希望の方は、本室まで郵便、FAX、E-mailでお申込みください。

また名大史ブックレット第1～7巻、『保存資料目録』第1～4集、名古屋大学国際フォーラム特別展示『名古屋大学の軌跡 国際社会と知的交流』のパンフレットおよびそのCD-ROM版も無償で配布しておりますので、こちらについてもご活用ください（郵送料はご負担ねがいます。『保存資料目録』は第1・2集が在庫僅少です）。



資料室日誌(抄)

- 2月5日 山口拓史室員、東京出張(国立国会図書館)。
 2月17日 大学史資料室協議委員会(第13回)開催。
 2月18日 大学史資料室運営委員会(第13回)開催。
 大学文書資料室室員選考委員会開催。
 2月29日 『名古屋大学大学史資料室保存資料目録』第4集を刊行。
 3月1日 『名古屋大学大学史資料室ニュース』第16号を刊行。
 3月2日 神谷智室員、金沢市・福井市出張(金沢大学資料館、福井県文書館、福井県立歴史博物館、4日まで)。
 3月9日 大学文書資料室室員選考委員会開催。
 3月11日 大学史資料室運営委員会(第14回)開催。
 3月14日 大学文書資料室室員選考委員会開催。
 3月16日 大学史資料室協議委員会(第14回)開催。
 3月23日 山口室員、東広島市・広島市出張(広島大学、広島県立文書館、24日まで)。
 3月31日 『名古屋大学史紀要』第12号、『名大史ブックレット8 岡崎高等師範学校 新制名古屋大学の包括学校』、『スケッチ名大史』刊行。神谷智室員が退職(愛知大学文学部助教授に就任)。
 4月1日 改組により「名古屋大学大学文書資料室」となる(室長・加藤証治、専任室員・山口拓史、専門職員・坪井直志、事務員・増田よしみ)。
 4月6日 全学教養科目「名大の歴史をたどる」授業開始。
 4月7日 社団法人日本電気協会より3名、資料寄贈のため来室。
 4月19日 瓜谷郁三名誉教授、赤澤堯名誉教授、情報提供および照会のため来室。
 4月20日 工学研究科教員より、「石丸文庫」資料受贈。
 4月24日 加藤証治室長、山口室員、東京都出張(日本アーカイブズ学会設立大会に参加。学習院大学、25日まで)。
 5月1日 堀田慎一郎専任室員、着任。
 5月14日 中島武美氏宅を訪問、第八高等学校関係資料受贈。
 5月17日 永井義雄名誉教授、資料寄贈のため来室。
 5月18日 水田洋名誉教授より資料受贈。
 中山理夫氏より資料受贈。
 5月25日 大学文書資料室協議委員会(第1回)開催。
 5月26日 神戸大学名誉教授角田美弘氏(八高卒業生)八高の関する情報提供および大学文書資料室見学のため来室。
 6月1日 加藤室長、八高会幹事会に出席。
 北海道大学附属図書館井上高聡氏、大学文書資料室見学および文書の収集保管活用に関する情報交換のため来室。
 6月2日 中山理夫氏、資料寄贈のため来室。
 6月7日 大学文書資料室運営委員会(第1回)開催。
 6月8日 赤津敏氏(八高会)宅を訪問、資料受贈。
 八高会事務局を訪問、資料受贈。
 6月14日 赤津敏氏宅を訪問、資料受贈。
 6月22日 江崎公朗氏(八高会)宅を訪問、資料受贈。
 横山秀吉氏(八高会会長)宅を訪問、資料受贈。
 6月23日 大学文書資料室運営委員会(第2回)開催。
 7月6日 全学教養科目「名大の歴史をたどる」において、平野真一総長による特別講義「名古屋大学の法人化と展開」。
 7月7日 紀要編集専門委員会(第1回)開催。
 7月12日 『名古屋大学大学文書資料室紀要』第13号原稿募集。
 7月22日 名大学生29名、文学部集中講義「日本の近世史料とアーカイブズ」で大学文書資料室見学のため来室。
 7月30日 山口室員、「全学計画・評価担当者会議」に出席。

— 大学文書資料室移転のお知らせ —

大学文書資料室は、この4月の大学史資料室からの改組にともなう業務の拡大にそなえて、本部別館(旧名古屋工事事務所)に移転することになりました。理科系食堂の北、道路に面した所にあります。年度内には移転を完了し、業務を開始する予定です。詳細については次号で報告します。

全学教養科目「名大の歴史をたどる」で平野総長が教壇に 「名古屋大学の法人化と展開」と題して特別講義

大学文書資料室では、全学教養科目「名大の歴史をたどる」を毎年前期に開講しています。対象は主に学部2年生です。いよいよそれぞれの専門分野に分かれていくにあたり、自分たちの通う大学のたどってきた歴史を理解することで、名大生としての自覚を一段と高めてもらうのがのねらいです。

そのような中、平野眞一総長と加藤鉦治大学文書資料室長の会談で、今回の講義のことが話題に上りました。総長は、講演会ではなく、講義というかたちで学生に直接語りかけ、学生の生の声を聴きたいと希望され、教養教育院の協力をえて実現の運びとなりました。

総長講義は、7月6日、全学教育棟A31教室において、「名古屋大学の法人化と展開」と題して行われました。「名大の歴史をたどる」は、全体が総説編（前身諸学校から現在までの通史）と各説編（名大史ブックレットをテキストにしたテーマ別）の二部構成になっています。今回の総長講義は各説編の1コマにあたりますが、こうした名大史の講義内容をうけ、未来の名大像を語っていただくという、まさに本講義をしめくくるにふさわしい内容でした。

受講した約120名の学生は、法人化後の名大のあり方についての話のみならず、名大生としての誇りを持ち、自ら求めて大学生生活を充実させてほしいと語りかける平野総長の話に、熱心に聴き入っていました。またマスコミも、この総長講義に注目し、2つのテレビ局と3つの新聞社により取材が行われ、それぞれのメディアで報道されました。

なお、この講義の詳細や、受講生のアンケート結果などについては、記録冊子を教養教育院と共同で発行する予定です。



名古屋大学大学文書資料室ニュース 第17号
Nagoya University Archives News No. 17

名古屋大学大学文書資料室

室長 加藤 鉦治（教授・併任）

専任室員 山口 拓史

堀田 慎一郎

専門職員 坪井 直志

事務員 増田 よしみ

発行日 2004年9月30日（年2回刊）

編集
発行

名古屋大学大学文書資料室

名古屋市千種区不老町〒464-8601

電話 & FAX : (052)789-2046

E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷

株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田 2-16-38